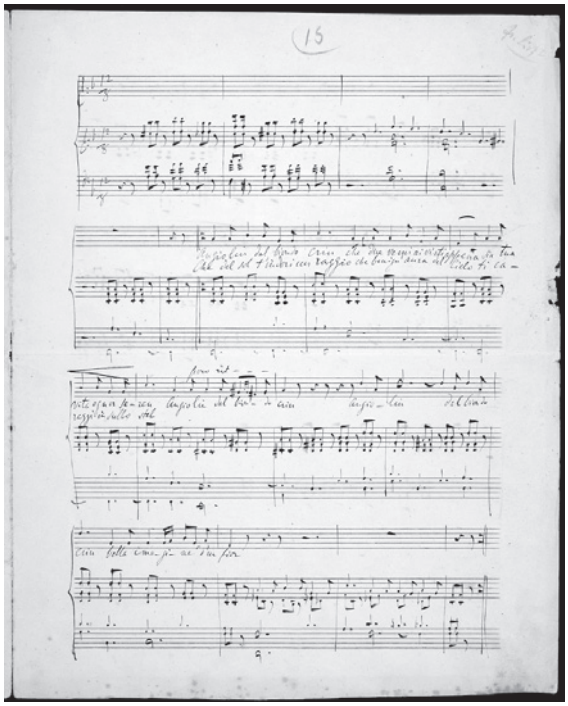
F. リスト作曲“*Angiolin dal biondo crin*”《金色の髪の天使》自筆譜（未出版稿）

平野（ひらの） 昭（あきら）
（文学部教授）

2011 年は作曲家フランツ・リスト（1811～86）生誕 200 年にあたり，静かながらリスト音楽再評価の気運が高まっている。1 歳年長の F. ショパンと R. シューマンのダブル・メモリアル・イヤーであった昨年と比べてしまうとやや地味ではあるが，演奏界ではリスト・プログラムが目白押しとなっている。もちろんピアノ音楽の世界の話しだ。リスト＝ヴィルトゥオーソ・ピアニストという剥がしがたいレッテル，作品は〈マゼッパ〉や〈鬼火〉等の入った「超絶技巧練習曲集」,〈エステ荘の噴水〉や〈エステ荘の糸杉〉等の入った「巡礼の年報第 3 年」といった曲集や〈メフィスト・ワルツ第 1 番〉〈愛の夢第 3 番〉〈ラ・カンパネラ〉等数えきれないほど多くのピアノ小品によって作曲家のイメージが形づくられている感がある。しかし，ピアノ音楽の巨匠というのはリストの一面でしかないばかりか，真の姿を歪めているか，あるいは全く見えなくしてしまう誤った評価でもある。

ベートーヴェン以後の 19 世紀オーケストラ音楽に決定的な新風を送り込んだ標題音楽としての交響詩（〈レ・プレリュード〉〈フン族の戦い〉等 13 曲）の確立はどんな小さな音楽史教科書でも触れられており，リストがピアノ音楽以外でも注目すべき作曲家であることは知られている。しかし，これでもリストの本質や全貌の半分を語ったことにもならない。

リストを，19 世紀を代表する宗教音楽作曲家のひとりとして見直すこと，そして，シューベルトから始まりシューマン，ブラームス，ヴォルフ，さらにマーラーとリヒャルト・シュトラウスに連なる歌曲史の流れに組み入れて見直すことこそ，このメモリアル・イヤーを起点とするリスト・ルネサンスの始まりとしなければならない。そのリストの歌曲第 1 作となる《金色の髪の天使》の署名入り自筆譜（写真）を本学が所蔵している。



リストの最初の作曲作品は 1822 年に書かれた《祖国芸術家同盟：ワルツ主題による 50 の変奏曲》の第 24 変奏であろう。ベートーヴェンが作曲した有名な《ディアベッリ変奏曲》Op.120 と同じ主題によってウィーン在住（一時逗留を含む）の 50 人の作曲家が 1 曲ずつ書いた変奏曲を作曲者名のアルファベット順に並べた興味深い共作変奏曲集なのだが，第 24 変奏には「ハンガリー生まれの 11 歳の少年：フランツ・リスト」作曲と記されている。「ハ長調」4 分の 3 拍子によるワルツ主題を，驚くことにリストは 4 分の 2 拍子の「ハ短調」によって変奏している。初作にしてこのような大胆な試みには大成の片鱗を窺うこともできる。しかし，この「50 分の 1 変奏曲」は習作的な性格をもつ作品であり，一般にリストのオリジナル初作は 1823 年作曲の「2 つのワルツ」の第 1 番「イ長調」とされている。が，この時期の作曲は単発的かつ散発的で，用途としては自らの演奏会で弾くためのピアノ曲が中心となっており，室内楽や

オーケストラ作品，さらに宗教的作品や声楽作品などあらゆるジャンルで重要作を発表し続けるようになるのは1840年代になってからと見てよいだろう。

リストが歌曲を何曲作曲したかを言うのは易しくない。ほぼ70曲と見てよいのだが，改訂稿や改作異稿まで数えれば100曲ほどにもなる。リストが初めて歌曲作曲に関心を示すのは27歳から28歳にかけてのころ，10月22日生まれであるから，1838年秋以降ということになる。つまり，リストの声楽作品に「若書き」はないのである。11歳から12歳にかけての1年半のウィーン滞在でリストはカール・チェルニーにピアノを師事しながら，ウィーン宮廷楽長アントニオ・サリエーリに作曲を師事するが，この間にベートーヴェンやシューベルトとも知己を得，巨匠たちの作品に強い関心を示していた。とくにシューベルトの自由な和声表現や転調法，異名同音変換，とりわけドイツ語でルフトパウゼと呼ばれる類のドラマティックな休止（静寂，間＝マ）の用法などに新しい音楽の可能性を見てとったようだ。1830年代はヴィルトゥオーゾ・ピアニストとして活躍するが，そのレパートリーには自作オリジナルの他にベッリーニやドニゼッティ，さらにはロッシーニなど当時人気のオペラ作曲家のヒット作品の主題によるパラフレーズやピアノ編曲が組み込まれていた。そして，自ら初めて歌曲を作曲する直前の1837～38年には集中的にシューベルトの歌曲（〈涙の賛歌〉〈アヴェ・マリア〉〈魔王〉〈ゴンドラ船頭〉〈白鳥の歌〉等々）によるピアノ編曲が現れている。

1839年に作曲されたリストの記念すべき歌曲第1作はイタリアの詩人チェザーレ・ボチェッラ *Cesare Bocella* の詩による《金色の髪の天使》S269, R593である。初稿は「イ長調」で作曲されており，1843年に初版出版されている。今日，決定稿として市販され演奏に供されているのは作曲から17年を経た1856年に改訂出版されたものに基づいている。リストは恐らく1856年に複数の改訂稿を作成したと推測されているが，本学が所蔵している自筆譜はこれまで知られていた自筆譜や複数の手稿写本と全く別の「ヘ長調」改訂稿である。

決定稿が全65小節の通作形式であるのに対し，この「ヘ長調」改訂稿は，第6小節第2拍と第15小節第1拍の間でリピート反復されるという他の稿にはない特徴をもっている。そのため全体の小節構成は全56小節となっている。

【「ヘ長調」1856年1月改訂稿自筆譜概要】

機械漉紙（透かし無し）：縦長25.5cm ×32.2cm

譜表：12段 譜　5線幅＝10mm，5線全長＝20cm，システム間＝14mm，ヘッダー＝28mm，

フッター＝24mm，左余白＝30mm，右余白＝27mm

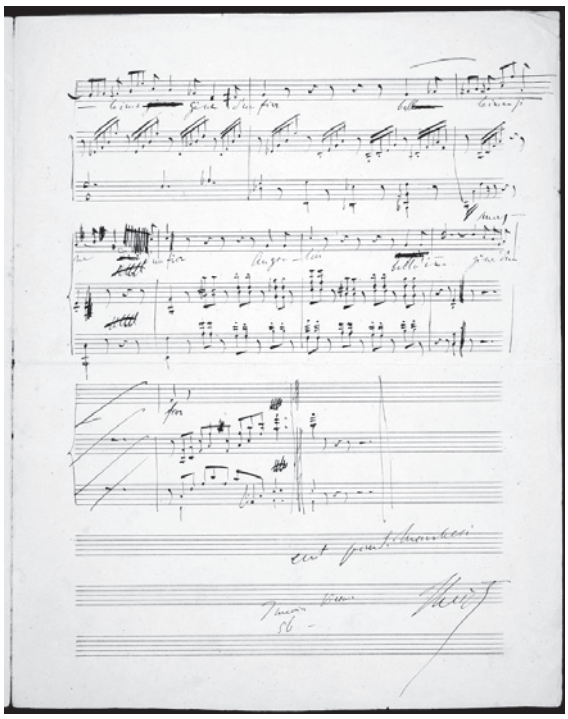
綴じ：3葉（6ページ中5ページ分記譜）記譜＝1recto，1verso，2r，2v，3r，未使用＝3v

表題：なし

歌詞：イタリア語

署名：3r. はシステム上9段記譜，下3段記譜なしで，フランス語で署名（4行：/は行変）

ecrit pour S. Marchesi / Janvier Vienne / 56- / FLiszt

「書く，S.マルケシのために/1月，ウィーンで/（18）56年/F.リスト」（写真）

尚，このリスト自筆譜に関しては本学出身のリスト研究者である福田弥氏（武蔵野音楽大学講師）が論文「F.リストの歌曲《ブロンドの小さな天使》の成立過程」（『芸術学』7号，2003年，三田芸術学会）で詳細に言及している．